



コウベモグラ

- ◆ 学名 *Mogera wogura*
- ◆ 分類 モグラ目 モグラ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約17センチ 体重約130グラム

平野部の水田の周りや畑、草地などの地下にトンネルを掘り、その中で生活をしています。真っ暗なトンネルで暮らすため、目はとても小さく退化していますが臭いにはとても敏感なようです。太陽の光に当たると死んでしまうといわれますが、そのようなことはありません。

トンネルを掘るときに出た土を地上に出すことで、モグラ塚ができあがります。トンネルの深さは地上から30センチくらいのところがよく使われていますが、トイレや産室などのいくつかの小さな部屋も作られています。モグラは自分の掘ったトンネルの中を移動しながら、落ちてくるミミズや昆虫の幼虫、時にはカエルなどを食べています。1日に自分の体重と同じくらいのミミズなどを食べていて、半日以上食べないと死んでしまうといわれています。

アズマモグラと比べると体は大型で、体重は2倍近くになります。これまで日本には本州中部を境にして東にアズマモグラが、西にはコウベモグラが分布しているとされてきましたが、近年では体の大きなコウベモグラが生息域を東に広げています。



ヒミズ

- ◆ 学名 *Urotrichus talpoides*
- ◆ 分類 モグラ目 モグラ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約10センチ
体重約20グラム

日光が当たる所には出ないことから「日不見」(ひみず)と名付けられました。あまり聞きなれない名前ですが、小型のモグラの仲間で、低山帯にある森や草原の落ち葉の下に生息しています。アズマモグラなどのように前足が大きく発達していないので、土を掘って長いトンネルをつくることはありません。厚く堆積した落ち葉と地面との間にすんでいて、ミミズや昆虫、ムカデ、クモ、植物の種子などを食べています。

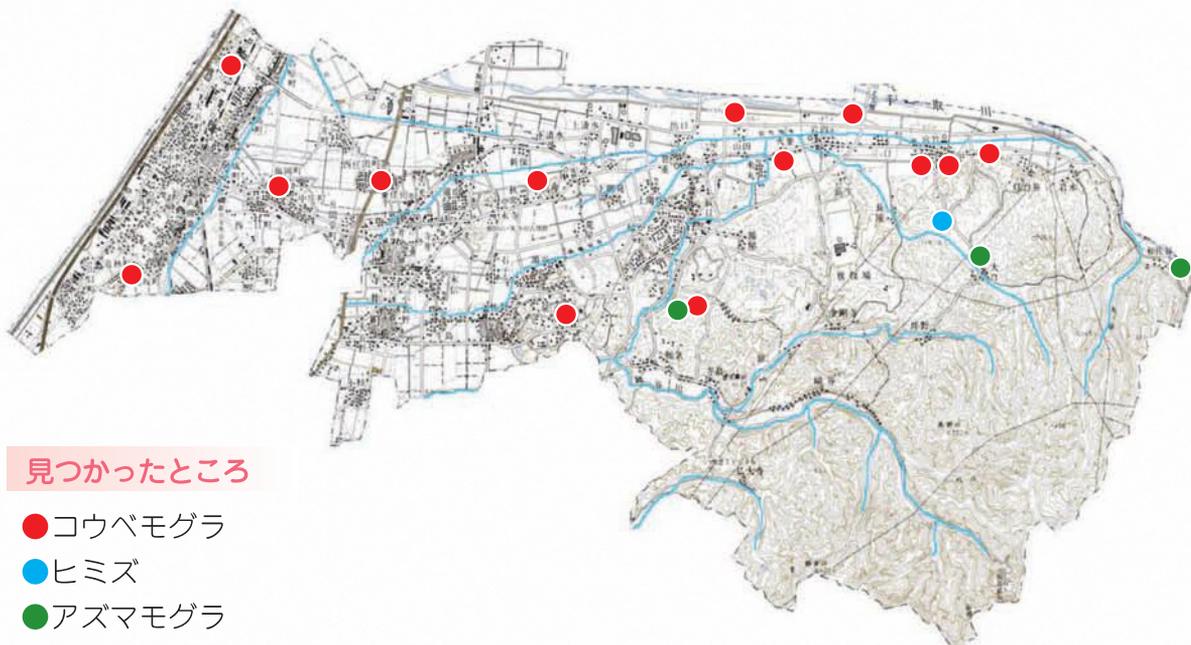


アズマモグラ

- ◆ 学名 *Mogera imaizumii*
- ◆ 分類 モグラ目 モグラ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約13センチ
体重約60グラム

もともと日本には広く生息していたモグラですが、大陸から進出してきたコウベモグラに生息地を奪われ、東へと追われていると考えられています。

石川県は生息域の中間付近にあるため、場所によって両種が隣り合うように見つかる場合があります。いしかわ動物園の敷地内でも、両種の生息が確認されています。





キクガシラコウモリ

- ◆ 学名 *Rhinolophus ferrumequinum*
- ◆ 分類 コウモリ目
キクガシラコウモリ科
- ◆ 大きさ 頭胴長6～8センチ
体重20～35グラム

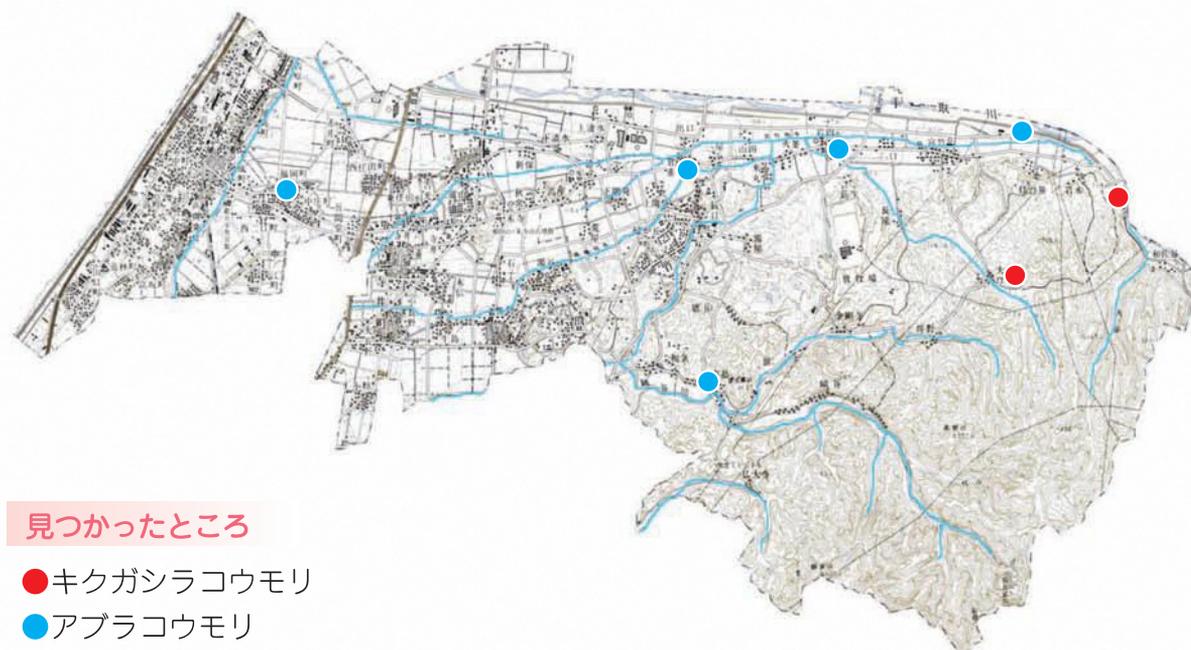
鼻の形が菊の花のように見えることから「菊頭」と名付けられました。自然の洞窟やトンネル、廃坑などでよく見られる種類です。冬期間は洞窟の中で冬眠をします。大口町地内の石切り場跡は、数は多くはありませんがキクガシラコウモリのすみかとなっているようです。



アブラコウモリ

- ◆ 学名 *Pipistrellus abramus*
- ◆ 分類 コウモリ目 ヒナコウモリ科
- ◆ 大きさ 頭胴長4～6センチ
体重5～10グラム

人家のまわりに生息していて、市内ではもっともポピュラーなコウモリと考えられます。別名イエコウモリとも呼ばれていて、家屋をねぐらとしていることから名付けられました。日が沈むとねぐらから出て、水田や池や川などの開けた場所で飛んでいる昆虫を食べます。



見つかったところ

- キクガシラコウモリ
- アブラコウモリ



灯台笹町

ニホンザル

- ◆ 学名 *Macaca fuscata*
- ◆ 分類 サル目 オナガザル科
- ◆ 大きさ 頭胴長50～60センチ 体重10～20キログラム

日本では本州から九州にかけて広い範囲に生息していますが、青森県の下北半島にすむニホンザルは、世界最北端に生息するサルとして有名です。リーダーとなるオスを中心として、メスとその子供や若いサルなど、数十頭の群れで生活しています。オスは生後3～7年で群れから出ると、別の群れに入るか単独で生活を始めます。能美市内に時折現れるサルは、群れではなく離れザルと呼ばれる単独で行動しているオスだけのようです。

おもに果実や種子、葉、芽などの植物質を食べていますが、昆虫やカニ、魚なども食べることもある雑食性です。春から夏にかけては柔らかな新芽を食べ、夏から秋にはアケビやサルナシ、ドングリなどを中心に食べています。食べ物の少ない冬場になると、木の皮や冬芽などが主食となります。

ニホンザルが移動をする時は、ほとんどの場合地上を4本の足で歩きますが、木の芽や葉を食べている時や逃げる時は木から木へと移動します。足あとは人間の手の形や足形とよく似ていますが、後足の親指が他の指と離れているのが特徴です。

— サルとヒトとの関係 —

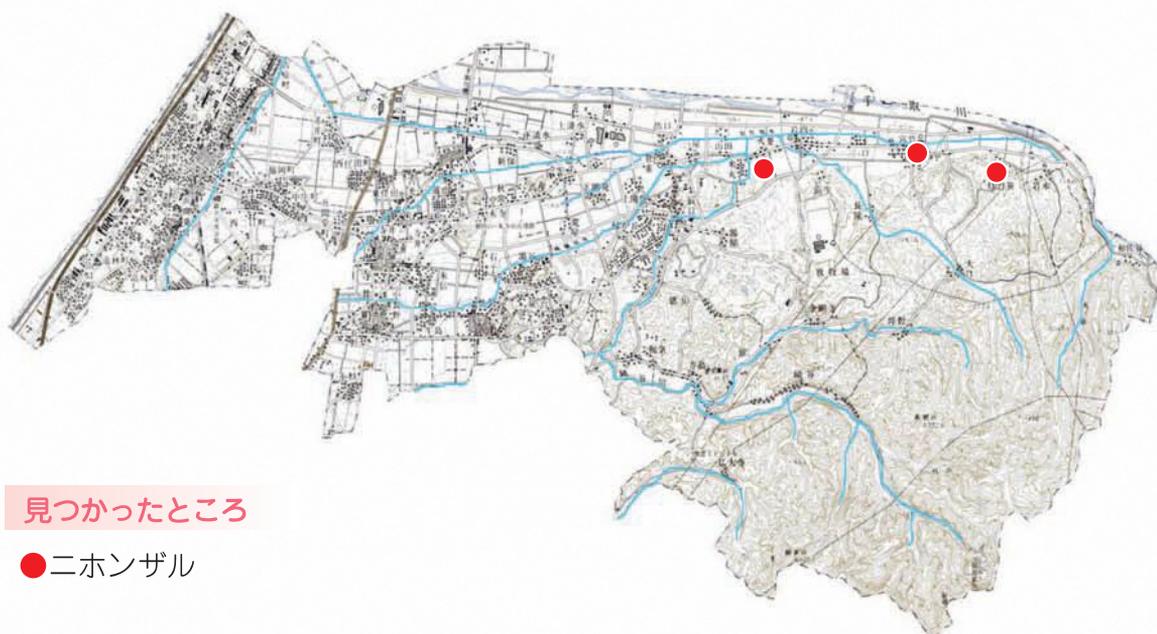
「猿は人間よりも毛が三本足りない」という迷信や「猿芝居」や「猿まね」などといった言葉にも登場するほど、サルは昔から私たちにとって、馴染みの深い野生動物でした。ところが近年ではサルによる農作物への被害が問題となっているところがあります。

昔の農村では、家の周りの田畑で長い時間をかけて作業をすることが多かったため、サルがそこに近づくことはありませんでした。ところが農村の過疎化がすすんだ現在では、人の少なくなった田畑にはサルが簡単に近づくようになってきました。こうして農作物の味を覚えたサルにとっては、田畑は最高のエサ場となり、繰り返しやってくるようになりました。さらに農村に住む人は高齢化がすすみ、人を恐れなくなったサルが、危害を加えるようにもなりました。

このような被害をなくすためには、柵やネットなどで農作物を守ることや、サルの群れを追い払うことも必要です。サルが簡単に農作物をとれないような環境作りがこれからの課題です。



人を恐れなくなったサル(宮竹町)



見つかったところ

●ニホンザル



タヌキ

- ◆ 学名 *Nyctereutes procyonoides*
- ◆ 分類 ネコ目 イヌ科
- ◆ 大きさ 頭胴長50～60センチ 体重3～5キログラム

今回の調査でもっとも発見記録が多かったほにゅう類です。タヌキの家族はいつも決まった場所にフンをすることが知られていて、これを「ためフン」と呼んでいます。ためフンはなわばりの中であって、そこにくらす仲間どうしが情報交換のためにとっても重要であると考えられています。

巣は自分で穴を掘ってつくることはせず、岩や木の下に自然にできたすき間を利用しますが、時にはキツネやアナグマが掘ったトンネルや、人家の床下などを利用することもあります。繁殖は春に巣穴の中で3～5頭の子を出産します。子は、その年の秋には独立します。

雑食性なので昆虫や鳥、カエルやネズミなどのほか、ドングリなどの果実、時には市街地にあるゴミ箱の中の残飯なども食べることがあります。季節や住み場所によっても食べ物は変わるので、タヌキの残したためフンを調べることで、彼らのくらしの様子を調べることができます。

調査期間中、交通事故によって死亡する個体も、ほにゅう類の仲間ではいちばん多く観察されました。漢字の狸は、里にいる獣を意味し、私たち人間社会の近くに生息している事を伺い知ることができます。

— 狸寝入り —

都合の悪い時に眠ったふりをするを「狸寝入り」といいますが、人を化かすといわれるタヌキは、実は臆病な動物で、猟師の鉄砲の音などの衝撃音に驚いたときに、一時的に気を失って仮死状態になり、再び蘇生して逃げるのがこの言葉の由来となっているようです。

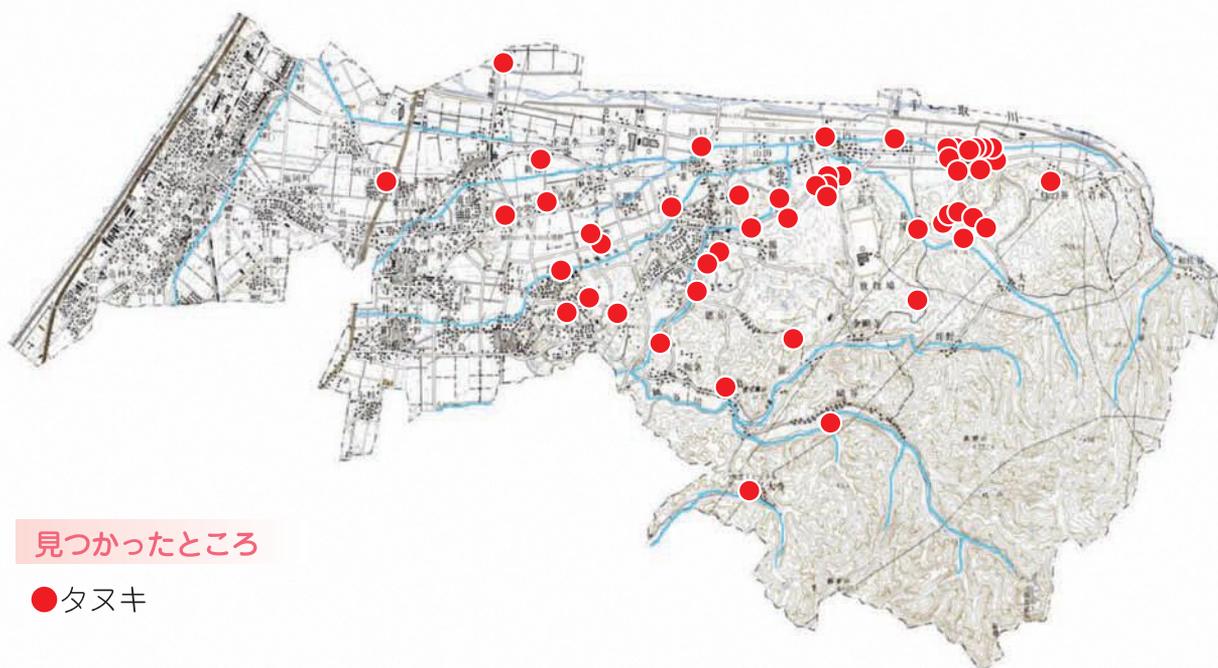
また「捕らぬ狸の皮算用」という言葉は、まだ捕まえてもいないタヌキの皮を売ることと考えて、手に入るかどうかわからないものを当てにして計画を立てることを意味します。



タヌキの家族は同じ場所にフンをするので古いものから新しいものまで、たくさんのフンが積み重なります。



足あとはネコに似ていますが、第3指が最も長く、歩行は左右に乱れるのが特徴です。



見つかったところ

●タヌキ



キツネ

- ◆ 学名 *Vulpes vulpes*
- ◆ 分類 ネコ目 イヌ科
- ◆ 大きさ 頭胴長50～80センチ 体重5～7キログラム

今回、丘陵部と手取川の河川敷で観察されました。タヌキとくらべるとなわばりの範囲が広いことも知られていますが、市街地の中ではあまり確認されませんでした。降雪時に実施した調査では、手取川の河川敷で多数の足あとを確認していて、川岸に置かれたテトラポットの隙間から出入りする姿が目撃されました。河岸にはウサギの足あとも多数観察されていることから、手取川の河川敷は多くの野生動物にとっては、貴重な環境なのかもしれません。

キツネは警戒心の強い動物としても知られていて、タヌキのように交通事故にあうこともほとんどありません。しかし丘陵部で行われていた餌付けに、毎晩のようにタヌキとともに姿を見せていたことから、他の野生動物と同様、人間との距離は近づいているようです。

ウサギやネズミ、小鳥、カエル、ヘビ、バッタなどの昆虫のほか、地上に落ちた果実なども食べています。キツネのフンは自分のなわばりを示すためのサインにもなっているので、比較的目立つところに観察されます。特に時間がたったキツネのフンは白っぽくなり、その中を調べてみると未消化の動物の骨や羽などが混じるのが特徴です。

狐の嫁入り

この言葉の意味には二つあります。一つは、夜の山野に光る青色の野火(狐火)が点在していることがあり、狐が嫁入りでともす提灯の灯り(狐火)に見えることをさしています。

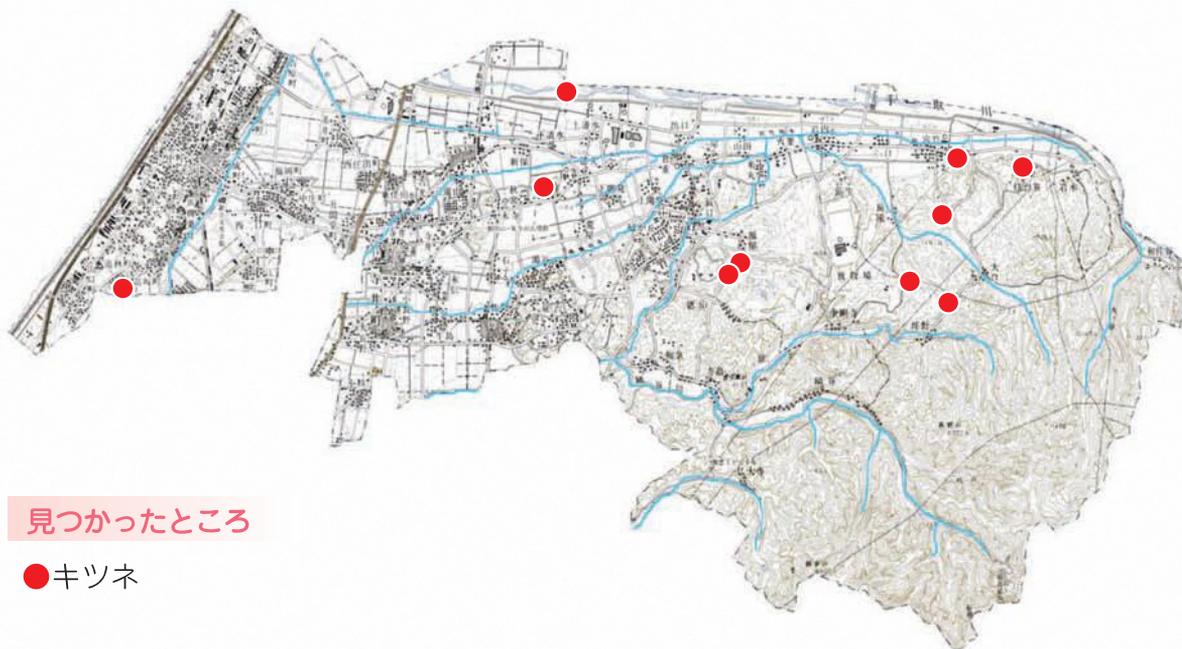
もう一つは、日が照っているのに雨が降る状態のことをさす場合です。いずれも自然現象としてはありうるのですが、一見、「狐につままれる(何がなんだかかわらなくなる)」ような怪奇現象であることからいわれたのではないのでしょうか。



時間がたって乾燥したフンは灰白色になりますが、これはほにゅう類の仲間ではキツネだけです。



ハンター歩行とも呼ばれていて、左右の足が一直線になるのが特徴です。



見つかったところ

●キツネ



テン

- ◆ 学名 *Martes melampus*
- ◆ 分類 ネコ目 イタチ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約50センチ 体重約1500グラム

夏毛は体全体が濃い茶色で顔は黒色ですが、冬になると背中から尾にかけて明るい黄褐色となり顔は白く、鼻のあたりと尾の先が黒くなります。このことから、スステンやキテンと呼ばれることがあります。

雑食性で、おもに季節ごとの果実を食べていますが、夏場には昆虫やクモ、カエル、トカゲ、小鳥なども食べています。夜行性で警戒心も強いので、目撃できる機会は少ない動物といえます。ウサギと同じように体のわりに足は大きく、足の裏に毛がはえているため、雪の上でも滑らずに歩くことができます。また、泳ぎも得意のようです。

なわばりを知らせるように目立つ場所にフンを残すので、季節によって食べるものが代わる様子をフンから知ることができます。イタチのフンよりは大きくて、長さが3～4センチほどのソーセージのような形をしているのが特徴です。降雪時の足あとを見ると、巡回するための決まったルートがあるようです。

— テントバ —

能美市内の広い地域で、テンのことをテントバ、あるいは単にトバということがあります。よくどこにでも顔を出す人のことを「稲架木(はさぎ)棚のテントバ」といっています。昔、水田によく見かけた稲を干す稲架木の棚下から、顔を出したり引っこめたりしているテンのようすからいわれたのでしょう。

また「狐の七化け、狸の八化け、貂の九化け」という言葉があります。テンが化けた話はあまり聞きませんが、季節によって体毛の色が変わり、また大変美しく高価な毛皮に様変わりすることからいわれたのかもしれませんが。



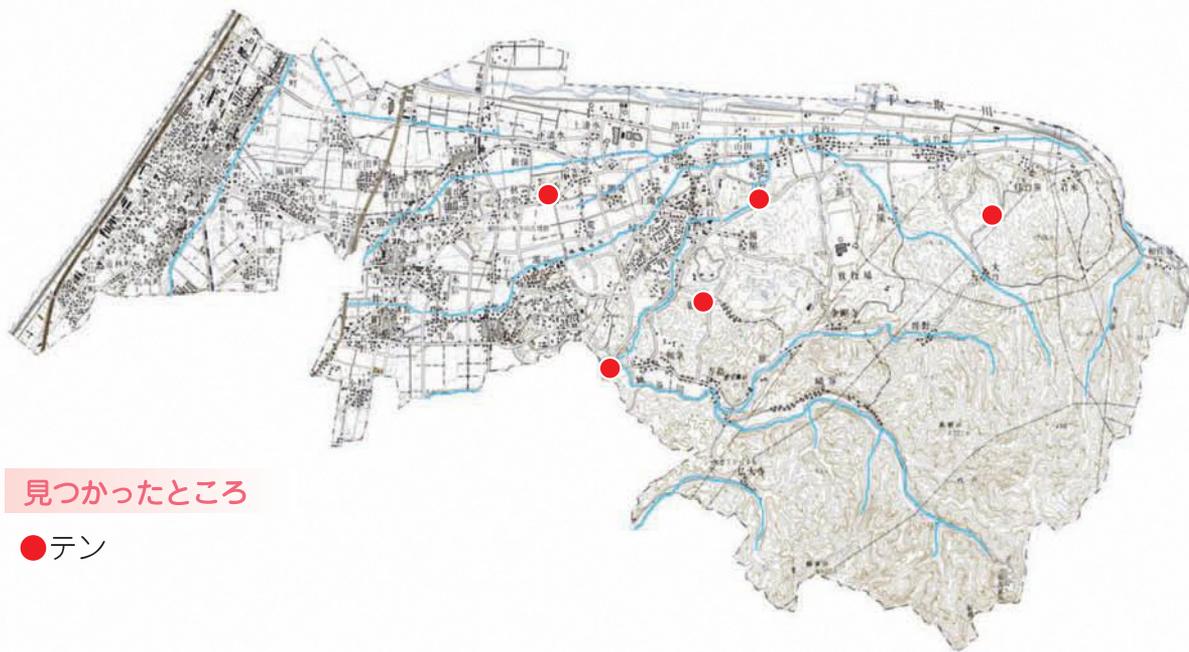
テンのえり巻き



エンピツほどの太さで、食べ物によって色は変わります。とにかく目立つ場所に見られるのが特徴です。



ゆっくりと歩行した時の足あと。歩く速度によっては足あとのつき方はまったく違ってきます。



見つかったところ

●テン



イタチ

- ◆ 学名 *Mustela itatsi*
- ◆ 分類 ネコ目 イタチ科
- ◆ 大きさ 頭胴長 15～30センチ 体重 100～500グラム

池や川などの水辺にすんでいて、泳ぎも得意で、おもに魚やカエル、ネズミ、昆虫などを食べています。夜行性で動きも速いので、あまり目にする機会はありませんが、特徴のある足あとや目立つ所にフンをすることで確認することができます。フンには動物の骨や羽などが混ざっていることが多く、先端が細くねじれるのが特徴です。オスの体はメスの2倍ほどの大きさになります。

養鶏場などで首を噛まれた鶏の死体が見つかることがあり、イタチは動物の血を吸い取るなどといわれていますが、肉食動物なのでそのような習性はありません。これは複数の鶏を捕まえたものの、持ち帰ることができずに放置していったものと考えられます。

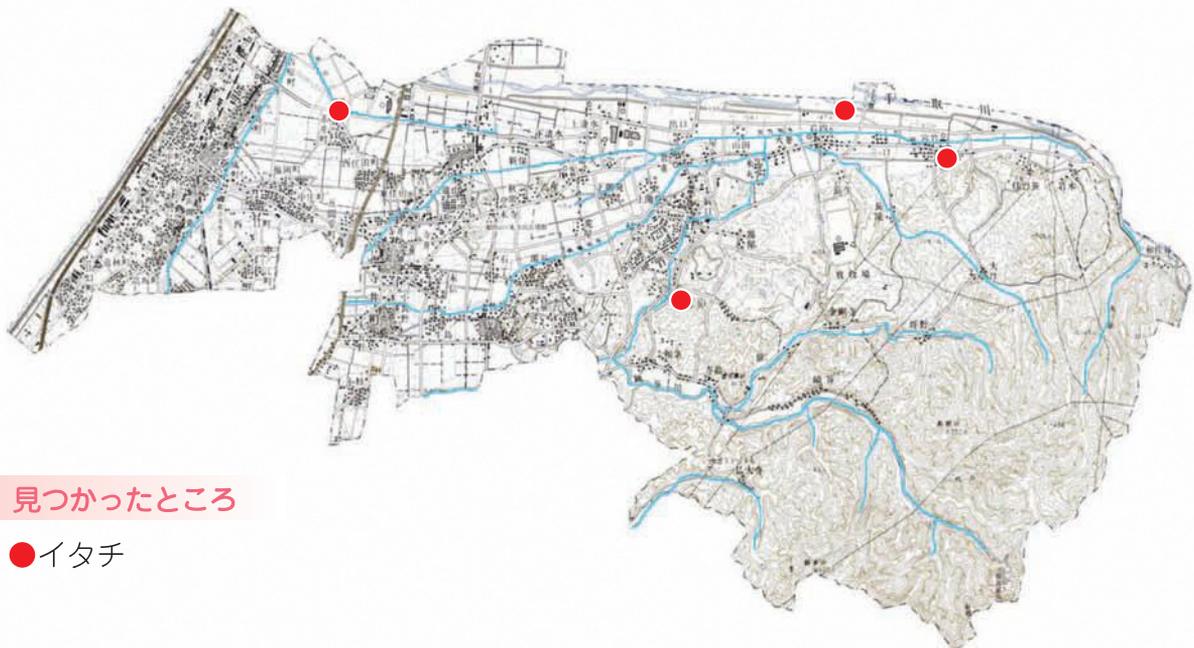
中国からミンクの代わりに養殖のため移入されたチョウセンイタチが、本州の西日本を中心に増えていて、在来のイタチのすみかを奪ってきています。今のところ石川県内では確認されてはいないようですが、今後は注意が必要です。チョウセンイタチは尾が長いことや、黄色が強い体色と、顔の模様の違いなどで日本のイタチと区別することができます。

— いたちごっこ —

言葉の由来は江戸時代に流行った子どもの遊びからで、二人一組となり「いたちごっこ」「ねずみごっこ」と言いながら相手の手の甲を順につねっていきます。そして両手がふさがったら一番下にある手を上に持っていき、また相手の手の甲をつねるという終わりの無い遊びなので、そこから「らちがあかず、きりが無い」ことを意味するようになりました。このようにお互いに同じことを繰り返すだけで事は進展しませんが、いずれは決着をつけなければなりません。

また、イタチは敵に追い詰められると、悪臭を放って敵をひるませて逃げることから、最後の難局をのがれる手段として「いたちの最後っ屁」という言葉も使われることもあります。

さらにはイタチの習性の一つに、同じ道を二度通らないことがあります。このことから、交際や往来が途絶えることを「いたちの道」になったといい、また、「いたちの道切り」といって、イタチが道路を横断するのを見ると、不吉なことが起きるといふ俗信もあります。



見つかったところ

●イタチ